

豊前市

令和7年度の豊前市内の神楽奉納は 49 ヶ所の神社で実施され、ようやくコロナ禍前の状態に戻りつつあります。しかし、その内容を見ると奉納時間の短縮であったり、奉納神楽の制限であったりと本来の形が変化しつつあります。その要因としては高齢化による地域の事情であったり、地域社会の祭りに対する価値観の変容などが考えられます。一方で、現地で見ると神楽の奉納は若男女を問わずたくさんの方が訪れ、和やかな雰囲気の中で神楽を楽しむ人たちの笑顔が印象的です。

その落差を埋めるべく豊前市では道の駅「豊前おこしかけ」での年 9 回の定期公演を実施し、5 年に一度の「豊前神楽まつり」を実施しています。本年度は 11 月 1 日、2 日に市制 70 周年記念として 4 年ぶりの「豊前神楽まつり」を開催し、高千穂神楽をゲストに迎え、子ども神楽の競演をふくめ豊前市内外から本当に沢山の皆さんのご来場をいただきました。

豊前市ではこうした取り組みを行いながら、今後も豊前神楽の伝承に向けた支援を展開したいと考えています。

上毛町

上毛町には「友枝神楽講」「唐原神楽講」「成恒神楽講」の3つの神楽団体が豊前神楽保存連合会に加盟しており、豊前神楽の保存、継承に日々努めています。

令和7年度の活動としては、秋祭などの奉納の他、上毛町内外で行われたイベントにも積極的に参加しました。9月27日(土)に開催されたゆいきらら「どうろう祭」では、友枝神楽講による大蛇退治が奉納されました。また、10月4日(土)、5日(日)に開催されたこうげ大池「灯りの祭典」では、町内3団体の子供神楽の他、豊前市の大村神楽講、黒土神楽講、三毛門神楽講の子供神楽3団体も参加し奉納されました。翌令和8年1月24日(土)に行橋で開催された「神楽人の祭典」では、成恒神楽講による三神が奉納されました。

今後もイベント等にも積極的に参加し、神楽のユネスコ無形文化遺産登録に向け活動を続けていきます。

添田町(津野神楽保存会)

津野神楽保存会が、5月3日に上津野地区の高木神社の神幸祭の御旅所で、翌日の4日に下津野地区の高木神社の神幸祭で、それぞれ津野神楽を奉納しました。3日の奉納では、色鮮やかな衣装や飾りを身に付け、19時から5時間以上かけて、笛や太鼓、鐘の音に合わせ、「盆」「舞上げ」「岩戸」などの演目が荘厳に舞われました。今年は祖父、母、息子の3世代で奏楽が行われる場面もあり、次世代への神楽継承に向けた、頼もしい姿が見られました。

7月26日には田川市の風治八幡宮の夏越祭において、赤村の大内田神楽保存会と5つの演目を分け合い、太鼓や笛など計15人の演者が入れ替わりながら、神楽を奉納しました。

津野神楽保存会では、これまで津野集落の地域住民のみで神楽を奉納してきましたが、地域の過疎化に伴う人口減少により演者や奏者の担い手の確保が困難となり、現在は集落外に住む津野出身者にも参加を呼びかけ、神楽の保存継承に努めています。

添田町においては民俗芸能の保存・継承について、活動の担い手による使命感やボランティア精神に頼る部分が多いのが現状です。そのため、添田町では民俗芸能の保存・継承に努める各団体と意見交換会を実施して、各団体が持つ担い手不足や後継者問題などの課題を共有し、活動団体と一緒に民俗芸能が保存・継承されるように取り組んでいます。

築上町



子どもたちによる小神楽(小原神楽講)
大阪関西万博(本文1頁参照)



若手部会のみなさん



津野神楽(添田町)

本町においても、少子高齢化による後継者不足は神楽の伝統継承に向けて直面する大きな課題です。町内7団体でも人手不足で舞えない演目が見られ、こうした事態は今後深刻化することが予測されることから、町内団体の若手(20歳代~40歳代/計18名)が結集し、令和4年度に若手部会を発足させました。その初奉納が令和7年4月下旬に小原正八幡神社で行われ、「岩戸開き」が披露されました。団体ごとに舞や囃子の違いはありますが、ルーツは同じで共通点が多いことから、それぞれの流儀を守りながら、共演できる演目を増やし、人手が足りない神楽団体の奉納に助っ人として加わることも今後検討していくそうです。

次世代を担う子ども達への神楽の継承も活発です。赤幡神楽保存会では、下城井小学校の児童に神楽講座を行い、児童が神楽保存会員を募集するポスターを手作りしました。

また、神幸祭での神楽奉納もコロナ禍以前の状況に戻りつつあります。しいだ梅まつりでの神楽奉納のほか、岩戸見神社では6年ぶりに流鏝馬が行われ、神楽が奉納されました。



大村神楽「四人剣」



友枝神楽



成恒神楽

神座~カムクラ~

神楽奉納の今と今後の課題

令和7年度は豊前神楽にとって幸先の良いスタートとなりました。コロナ禍以降、休止中だった大内田神楽保存会(赤村)が活動を再開しました。詳しくは3頁をご覧ください。また加盟団体による子ども達への神楽の継承に係る取組も特筆されます。昨年話題となった大阪関西万博では、福岡県を代表して小原神楽講が御先や小神楽を披露しました。特に小神楽を懸命に舞う子ども達の姿は大勢の観客の目を引き付けました。豊前神楽の魅力を全国にPRできたと思います。年末には、神楽が令和10年度にユネスコの世界無形遺産登録を目指す日本の次期提案候補に選定されました。講員減少等の諸課題はありますが、これらの明るい話題とともに本年度の活動状況を報告します。

各地の神楽奉納と継承への取り組み

みやこ町

令和7年度における、みやこ町内での豊前神楽の式例奉納状況は以下のとおりです。

1. 燈畑神楽(みやこ町犀川燈畑) :中止
2. 上伊良原神楽(みやこ町犀川上伊良原) :中止
3. 上高屋神楽(みやこ町犀川上高屋) :奉納(4月26日)
4. 光富神楽(みやこ町光富) :奉納(5月3日)
5. 横瀬神楽(みやこ町犀川横瀬) :奉納(5月2・3日)

本年も式例奉納が無事行われた処とそうでない処に分れましたが、嬉しいことに奉納実施が1団体増える結果となりました(光富神楽が奉納再開)。また、奉納実施団体を中心に町内外で行われる神楽イベントへも参加しました。

これまでも奉納できた処とそうでない処の差は、奇しくも標高100mを境にした山間地と平野部の地域差とみることができうるうえ、これは地域における伝承環境の厳しさが反映されたものではないかと考察してきたところです。今年もその状況に変化がなかったということは、そうした環境下で新型コロナが要因だったとはいえ、一旦中止された神楽を含む民俗芸能等の再興がいかに困難かを如実に表しています。奉納復活を含めた神楽を含む民俗芸能・行事の「伝承の難しさ・厳しさ」はある意味言い古された感すらある古くからの課題ではありますが、現在ほど切迫感が高まったことはないのではないのでしょうか。

今後も状況の注視と共にこうした状態の回復や支援に何が有効・必要なかを本連合会を含めた関係団体や機関・行政が協力して方策を検討・模索してゆきたいところです。

吉富町



土屋神楽講



吉富神楽講

本町には「土屋神楽講」と「吉富神楽講」の2つの神楽講があり、それぞれ豊前神楽保存連合会に加盟しています。両神楽講は町内で行われるイベントにおいて神楽を奉納するほか、子どもたちによる神楽活動も盛んに行い、地域文化の継承に力を注いでいます。令和7年度の吉富町の秋祭りでは、コロナ禍以前の姿に戻り、多くの地区で神楽奉納付きの通常開催が実現しました。ただし、どの神楽講においても「後継者の育成」は大きな課題であり、世代を超えて伝統を守るためには信頼関係の構築が欠かせません。これは単なる技術の伝承だけでなく、長い年月をかけて築かれる文化そのものの継承です。未来に向けた継続的な取り組みが、2つの神楽講の「伝統」を後世まで受け継ぐ鍵となると思いますので、今後も取り組みが継続されていくことを期待しています。



上高屋神楽「地割」



光富神楽「前御先」



横瀬神楽「四方鬼」

苅田町(南原神楽講)

苅田町の南原神楽講では、工夫を重ねて神楽の継承に真摯に努められた結果、例年以上に、「戸前」「御先」など豊前神楽を構成する演目の奉納ができました。例年奉納している、みやこ町豊津錦町の稲荷神社に加えて、行橋市行事の貴船神社など、奉納神楽の依頼が増えており、活躍の場も大きく広がっています。また、田川行橋京築ブロック交流会で公演するなど、社会福祉活動への慰問公演を行っており、神楽を通じた人と人とのつながりを大切にしています。

しかしながら、講師の高齢化は年々進んでおり、後継者の育成が重要な課題となっています。同講では、神楽の楽しさを伝えて歴史を継承していきたいとの気持ちから、苅田町子どもフェスティバルで神楽体験の機会を設けるなど、小学校や地域で子供を対象にしたPR活動や神楽の魅力発信にも力を入れています。

令和7年実績

- 1月19日(日) 与原下区(与原下区公民館)
- 2月1日(土) 東九州神楽人の祭典(大濠公園能楽堂)
- 2月8日(土) 中央公民館まつり 神楽体験あり(中央公民館)
- 2月15日(土) 田川行橋京築ブロック交流会(総合保健福祉センター)
- 3月8日(土) 西日本ハムフェア前夜祭(京都ホテル)
- 4月12日(土) 南原区いきいきサロン(南原文化センター)
- 6月28日(土) 馬場小学校子どもひろば(馬場小学校体育館)
- 9月1日(月) 風鎮祭奉納神楽(行橋市行事貴船神社)
- 9月13日(土) 苅田小学校子どもひろば(苅田小学校)
- 10月4日(土) 錦町稲荷神社奉納神楽(みやこ町豊津)
- 10月26日(土) 苅田町子どもフェスティバル 神楽体験(中央公民館)
- 11月1日(土) 苅田工業高校 工友会総会(京都ホテル)
- 11月22日(土) 博愛苑

令和8年

- 1月10日(土) 南原区いきいきサロン(南原文化センター)
- 1月17日(土) 馬場区いきいきサロン(馬場区公民館)



貴船神社奉納(行橋市行事)



錦町稲荷神社奉納(みやこ町豊津)



今井神楽講「盆」



道場寺神楽講「岩戸」

行橋市

行橋市では4団体(稲童神楽保存会、今井神楽講、道場寺神楽講、元永神楽保存会)が豊前神楽を継承していますが、現実的に舞うことができるのは今井神楽講と道場寺神楽講の2団体になっています。この2団体も少子高齢化等により神楽を継承するのは依然として厳しい状況にあります。今なお精力的に活動しています。

今井神楽講は神幸祭、新嘗祭、新年祭で氏神を祀る熊野神社に神楽を奉納しました。新年祭では今井津須佐神社でも奉納しています。また、神事以外にも様々なイベントに出演しました。市が開催する小中学校芸術鑑賞会では小学校に赴き神楽を実演しながら紹介し、地元中学校の文化祭では生徒の神楽の指導にあたりました。第53回行橋市民文化祭オープニングでは「盆」を披露して会場を沸かせ、熊野神社でも様々な演目を披露しました。一般市民から「祝い事があるので神楽を舞ってほしい」との要望にも応えたほか、「東九州神楽人の祭展」に京築地域の神楽団体とともに出演し、「岩戸」で見事にイベントを締めくくりました。

道場寺神楽講は活動に制限があるものの、熱心な子どもたちにより神楽が継承されています。子どもたちは関心が高く、その習得技術は目を見張るものがありますが、受験等が控えていることもあって神楽に専念できないのが実情です。将来がかかった子どもたちの方が身分の安定した社会人より一層厳しい状況といえるでしょう。とはいえ、氏神を祀る北山神社で執り行われた新年祭では拝殿をとりまく大勢の参拝者に見守られながら神楽を奉納し、力強く「岩戸」を開いてめでたく新年を迎えました。

赤村(大内田神楽保存会)



大内田神楽保存会、復活。そして、次世代継承への取り組み

令和3年ごろから活動を自粛していた大内田神楽、昨年から役員交代などを経て保存会が活動を再開。新しい世代の入会によって、会の規模も大きくなり、フレッシュな顔ぶれでの再スタートとなりました。

これまでの神事として受け継いできた格式の高い例大祭での披露とともに、赤村文化連盟にも再加入するなど民俗芸能として地域の活性化に弾みとなる活動に広げることになりました。

最近では、次世代継承の一環として、村の小学校で体験活動を展開することがありました。この日は「散米」「綱御前」を、保育園児と小学校4・5年生の計86名の前で演じ、引き続き参加した児童はお神楽体験として面をかぶり、実際の衣装をつけて神楽を体感していました。「重い」と感じたり「動きにくい」などの声をもらしながらも、保存会から身振りさぶりで舞の作法を真似ていました。中村会長は「少しでも村にある神楽を身近に感じてもらえれば」と、感慨深い様子で見守っていました。

田川市(春日神社岩戸神楽保存会)

令和7年度も春日神社が執り行う神幸祭・夏越祭・神待祭での神楽奉納を軸に活動を行ってきました。

特に毎年5月の第4土・日曜日開催の神幸祭では多くの皆さんの前で舞うことができました。日中は神輿と共に地域を巡行し、鬼神に抱かれ大泣きする子どもや戦いを挑んでくるやんちゃ坊主など賑やかなお祭りとなりました。道中神楽では、2人の小学生が神楽デビューを果たし、ちびっ子鬼も大歓声を浴びていました。これから先、私たちの神楽を見てくれたり、鬼神に抱かれたりしたことをきっかけに神楽に興味をもって、こうした形で伝承していってもらえればと思います。

一方、神待祭では神社拝殿において、400年伝承されてきた神楽ひと舞ひと舞を丁寧に奉納させていただきました。

また、令和7年は春日神社鎮座1250年にあたる年でした。10月には式年大祭が執り行われ、福岡県神社庁雅楽部による「蘭陵王」に続き、神楽を奉納させていただきました。勇壮な「蘭陵王」の後、ピンと張りつめた空気の中での演舞となりましたが、いつもと違う雰囲気での奉納は良い経験となりました。



神幸祭(猿田彦)



神幸祭(次代を担う子どもたち)

北九州市

北九州市域で活動されている大積神楽保存会(門司区)、合馬神楽保存会(小倉南区)、横代神楽保存会(同前)の3団体は概ね従来の形式で神楽奉納を行っています。

大積神楽保存会では、例年2月初旬の節分行事に合わせた博多の櫛田神社、下関の亀山八幡宮への奉納、10月にはこれまでコロナ禍で中止していた門司区風師神社での奉納、11月は下関の海峡レモン祭りに出演するなど、広く活動を行っています。さらに本社で行われた大積天疫神社の秋祭奉納では300名近い来場があり、賑わいをみせました。

多くの方に神楽の魅力を伝えている大積神楽保存会ですが、会のメンバーは15名ほどで存続していくには厳しい現状があります。そのため、後継者の育成として、地域の小学校で講演を行い子供の参加を促しています。また、神楽へ興味を持った市内の方であれば誰でも参加できるように広く周知をしています。

人材不足はどの団体も喫緊の課題ですが、神楽の伝統を残すために、様々な方法で普及活動を行っています。



大積神楽保存会(秋祭奉納)